

第四次滋賀県環境学習推進計画の策定にかかる検討の経緯

○滋賀県環境学習等推進協議会

令和元年 8月28日 第三次計画の実施状況について

令和元年11月26日 環境学習の状況や課題について

令和2年 2月 6日 第四次計画の骨子案について

令和2年 8月18日 第四次計画の素案について

令和2年10月16日 第四次計画の答申案について

※環境学習等推進協議会の開催状況は以下の県 HP 参照

<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/hozen/300835.html>

○滋賀県環境審議会環境企画部会

令和元年11月18日 第三次計画の実施状況および改定について

令和2年 6月16日 第四次計画の骨子案について ※書面開催

令和2年 9月 1日 第四次計画の素案について

令和2年11月 9日 第四次計画の答申案について

※環境企画部会の開催状況は以下の県 HP 参照

<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/kankyoku/22343.html>

○滋賀県議会 環境・農水常任委員会

令和2年10月 5日 第四次計画の素案について

令和2年12月15日 第四次計画（原案）に対する意見・情報の募集について

※環境・農水常任委員会の開催状況は以下の県 HP 参照

<https://www.shigaken-gikai.jp/>

○県民政策コメント

令和2年12月18日～ 第四次計画（原案）に対する意見・情報の募集について

令和3年 1月21日 <https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/koho/e-shinbun/bosyuu/315564.html>

第四次滋賀県環境学習推進計画（案）に対する主な意見 <概要>

令和2年10月16日（金）滋賀県環境学習等推進協議会（第2回）

- ・ P.4 の国の動きの中で、地域循環共生圏に関連した記述について、持続可能な地域づくりを地域の人たちが中心となってやっていこうというニュアンスにしてはどうか。
- ・ P.5 「滋賀県の動き」の琵琶湖保全再生計画に関連した記述で、固有種や水草などレッドリストに属するものを守るというニュアンスを入れた方がよいのではないか。
- ・ P.6 の学習時間の確保が課題という中で地域学習の重要性が述べられているが、地域学習の重要性は時間がないからだけではないので、もう少し文言を充実させるべきではないか。
- ・ 時間がないから仕方がなく地域学習をやるというニュアンスにとらえられないように、地域学習にはこんなメリットがあるということを表現できればとよいと思う。
- ・ P.8 の「多様ないのちのつながり」は、未来のために考えるということが重要なので、そのような概念を入れた方がよいのではないか。
- ・ 将来世代に向けて、未来に向けてというような内容をもう少し強調するとよい。
- ・ P.10 ギアモデルの4つのステップに関して、環境学習では、「気づく」「考える」「行動する」のどの段階も「学ぶ」なので、ステップに「学ぶ」は本当に必要なのかと思っている。
- ・ 人と人のつながりを考えると、人を大事にする、他者を思いやる心、人権的な感覚が大事だと思う。地域に愛着がなくても、学習を重ねていくことで地域への愛着は深まっていく。地域に愛着がある人が行う、という話ではないと思っている。
- ・ 幼児期では教え込むのではなく、体験を通して学ぶ時期といわれる。幼児期では「気づく」は上位目標であり、「感じる」や「関心をもつ」ことからのスタートと思う。
- ・ P.15 で求められる活動の例に「琵琶湖をはじめとする滋賀の豊かな自然」とあるが、森・川・里・湖を入れたらどうか。
- ・ P.15 市町の連携の必要性が書かれているが、市町の環境政策は差がある。求められる活動の例の記載で、協力・連携の前に「情報交換」を入れてはどうか。
- ・ P.16 に県の施策体系として6つあるが、7番目に「成果を内外に発信」を入れたらどうか。
- ・ P.30 環境保全行動実施率について、県政世論調査と県政モニターアンケートの2つの調査がある、というところはもう少し強調しておいた方がよい。

- ・「自然の恵みの活用」という視点が薄いように思える。11ページの「求められる活動の例」にコラムとして「毎日の食卓から環境を考えよう」とあるが、コラム上の文章にはそういった記載がない。
- ・自然の恵みをいただくことで、自然を守ることが大切だということを理解できると思うので、もう少し食との関連を活動の例で文章化して、体験が、食あるいは自然の恵みと結びつくような具体的な表現を追加していただきたい。
- ・10ページのギアモデルのイメージについて、ギアの中心にある軸は地域への愛着“近江の心”を表現とあるが、これを人育てのギアの軸の中心だというふうに理解すると、社会づくりのギアの中心は何だという話になるため、循環型社会や持続可能な社会の実現につながっていくというインプットに対して、どのようなアウトカムがあるかという対比をした方がわかりやすいのではないかと。
- ・23ページ「多面的な機能をもつ森林づくり」に関連し、滋賀県でも薪ストーブの導入は補助金を出しており、薪の利用やバイオマス資源の促進といったものも入れることができれば良いと思う。
- ・子どもたちを連れてエコクラブや発表会に参加するが、南部の方は子どもたちも問題意識持って発表をしていて、北部の方は自然がいっぱいあるという内容の発表が多くある。地域格差があるのでどのように北部を盛り上げるかという辺りも入れていただけるとありがたい。
- ・環境学習と意識されていなくても、川と暮らしのつながりであったり、湖と暮らしのつながり、山とのつながりというものを地域学習の中でされていて、その地域の学習自体も環境学習につながっているという意識を持っていただくことで環境学習が広がるのではないかと。
- ・地域を題材にするということは、当然環境が入ってくるので、それ自体が環境学習である。やはり基本は地域の素材を学ぶ、知る、そこで体験するということが環境学習の出発点であるのではないかと。次期計画では、そういった点を強調してもらっているので良いのではないかとと思われる。
- ・様々なプログラムの中で「解決する」というところまで辿り着くのは難しいのではないかと。環境への取り組みが進んでいるドイツやスウェーデンでは、社会問題があった場合に、自分がどのようにすれば解決できるかということ学ぶプログラムが小学校にある。環境学習プログラムは、そこまで踏み込んでいかないと、解決するまでいけないのではないかとこのことを思っているので、環境学習プログラムの内容と質を考えていきたい。
- ・自分たちが調べた地域を地域社会に伝える機会はないように思える。子ども時代から自分たちが学んで気づいて、発表することで社会も変わっていくというような体験につなげることが大事。
- ・体験は人々にとって千差万別で、たくさん体験する子どもとほとんど体験しない子どもがいるが、ある程度一定のレベルまでを体験してほしいと思ったときに学校というのは一番大事ではないかと。
- ・学校も教えることがたくさんあり、先生方も大変だと思うが、体験や総合学習を行うのは学校の先生だけでなく、地域の協力ができない。その体制をどのように作るかというのは、学校の先生、教育委員会だけに任せていても、なかなか手が回らないというのが現状だと思われる。
- ・環境学習のための講座をしたり、体験会をしなくても、学校の中で日常的に学べるものになってほしい。すべての人が常に意識して環境負荷を減らしていくことがこれからは必要になると思う。

滋賀県環境審議会環境企画部会 委員名簿

氏名	主な職
仁連 孝昭	滋賀県立大学名誉教授
坂下 靖子	たかしま市民協働交流センター事務局長
山田 貴子	NPO子どもネットワークセンター天気村代表理事
石川 聡子	大阪教育大学教育学部教授
東野 達	京都大学名誉教授
岸本 直之	龍谷大学先端理工学部教授
中野 伸一	京都大学生態学研究センター長教授
西野 麻知子	元びわこ成蹊スポーツ大学教授
吉原 福全	立命館大学理工学部教授
前畑 政善	神戸学院大学人文学部教授
辻 博子	一般社団法人滋賀グリーン活動ネットワーク推薦者 (一般社団法人滋賀グリーン活動ネットワーク事務局長)
上村 照代	滋賀県地域女性団体連合会推薦者 (滋賀県地域女性団体連合会副会長)
橋川 涉	滋賀県市長会推薦者 (草津市長)
野瀬 喜久男	滋賀県町村会推薦者 (甲良町長)
河本 晃利	近畿地方環境事務所長
高橋 進	(公募委員)
溝江 愛未	(公募委員)
南村 多津恵	(公募委員)